

讀

論

藏

庫

江苏工业学院图书馆
书章



鏡花全集 卷五 第五回配本（全二十九）

昭和十五年三月三十日 第一刷發行
昭和四十九年三月四日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

錦帶記	(明治三十二年二月)……………	一
さらく越	(明治三十二年二月)……………	一四
湖のほとり	(明治三十二年四月)……………	一六
湯島詣	(明治三十二年十一月)……………	三九
幻往來	(明治三十二年十一月)……………	三八
名媛記	(明治三十三年一月)……………	四〇九
弓取町人	(明治三十三年一月)……………	四三
白羽箭	(明治三十六年十一月)……………	四一

高野聖	(明治三十三年二月)……………	五七
海の鳴る時	(明治三十三年三月)……………	五八
湯女の魂	(明治三十三年五月)……………	六五

錦
帶
記

— 128 —

序

浦里時次郎

「傲慢な。無禮な、生意氣な、店子を取つて占めようといふのに、其の身装ではあまり質素だ、内端だ、陰氣です。一つ花々しく行りませんか、若返つて緋緘の鎧といふだ。」

鎌造

「お前方は、此虹を、不思議だの希代だのというて騒ぐ前に、赤い花、翠の草、紫の雲、白い蝶々を見て、何故吃驚しないんだ。」

お澄

「浦里さん、あの、若旦那様でせう。きつと又、お晝寝なんですよ。」

源

「こんな長屋は、土龍が持上げると、宙に上つて、蝙蝠の羽に乗つて、飛びまひますぜ、可恐い。」

辰

「そ、そ、そ、それが不可え、ちよツ不可えなあ。小汚えちやあねえか。誰が掃除をするんだ。ちやむだつて叱言をいつてる内に、鼻紙を棄てる奴もねえもんだ。」

お禮の母

「何がよ、何うしたといふんだよ。いゝえさ、何が何うしたといふんだよ。」

相良阿禮

「何ね、蔭ぢやあ、あんなことをいひますけれど、私が今まで爲置いたことで、相良といふので、お禮といふので、づつと出れば辰なんぞに。」

前後五六町が間、日中暑さの爲に人足の途絶えた巢鴨の通、最些とで庚申塚に成らうといふ板橋街道は、駒込、白山のあたりから深く地に印した荷車の轍の跡が、遙に絶間なく北に向つて、二筋續いて居るが、町幅の廣い處では縦横に入亂れて、筋と筋とが重り合ひ、恰も鼓の調の緒を眞中で絞つたやうな、泥は煎り付き、砂利が熱して、弾き破れはしないかと思はる、赭黒い地の、二岐に分れた辻の角、片側は往來から弓形に大きく入込んだ邸の門の前で、爰も未だ水を打たず、邊に一滴の濕もない。遙か南の交番に立つた巡查の洋劔の色も、目に焚けて朱の棒の如くに見え、八月十二日午後三時半の太陽を一葉の遮るものもない、露出しの郵便函、塗たての新しいので、いきれの立つ、ペンキの臭の眞黒な中に、片脰をついて、頬を支へ、右手に鉛筆を持ちながら、葉書をちつと見て居る學生があつた。

赤茶けた、ごはくした、鰐廣の麥葉帽を頂いたが、一着した金釧は冬服で、肩のあたり、胴のあたり、窄袴の折屈など、立居に擦れたのが薄くなつた、其處から汗が染んで居る。脊の高

い瘦せたのが、身を斜に、眞直な郵便函に凭れてるから、これを炎天の滯標といはう。

暫時は此滯標、草木は勿論、萬有皆動かず、そよとの風もなかつた。

唯見ると、太陽が凸凹な地に激して、其の光線は脈を打つて揺いだが、今此の學生が葉書を買つた、郵便物の取扱をする、曲角の質屋の土藏の屋根の鬼瓦が、眼をぐる／＼と廻して、口が碎けようとして地震した。

渠はふと心付いたやうに、持つてた鉛筆を耳に挟んで、郵便函に頼杖したまゝ、件の葉書を左の乳のあたりの衣兜に納れると、同じ衣兜に挿して居た平骨の扇を抜いて取り、母指の先と人指指と兩手で要を押しながら、一間々々扇を繰出すが如く開いて、胸のあたりを泰然と煽いだ。

されば東京の一端を通じた、暑さで人通のない、板橋街道の中ほどに、唯一ツ白い扇がひらひらと動いて居る。頓て學生は頼杖を脱して、手を添へて、丁寧な扇を畳み、靜かに其を衣兜に挿して、上を一ツ壓へたが、其手で葉書を引出しつゝ、函の上に乗せた。それから膝と膝を絡めて居た細長い脚を解いて、くるりと向をかへると、背向になつて葉書に臨み、耳なる鉛筆を取つて、さら／＼と書いた。其まゝ、投函するつもりであらう。學生は五六行認めて、鉛筆の先を突立てるやうにして一寸休む。

廣い額から點々と汗が垂れるので、急いで手の甲で、眉間を一太刀といふ構へで押へた。けれ

ども、指を傳つて血を絞つたやうな汗は留まらず落ちた、葉書の面の處々。

二

別に仔細もないことを、學生は何を狼狽へたのか、慌しく掌で葉書を横ざまに拭つたので。

何條堪るべき、鉛筆の墨は一刷刷いたやうにかすれて、薄く墨流しになつて兀げた。字の消えた痕を手で押へて瞻つて居ると、また汗が垂れて彌が上に落ちた。

此爲に學生は、汗流れて書けず候」と認めて、筆を留めることにしたが、其汗流れて書けず候を記し果てると、薄髯の生えた口許に苦笑した。鉛筆は葉書でくるくると巻いて、又衣兜の中に掴み入れて、再び衣兜から取出したのは、マッチと、それから馬尼刺煙草、Isabella と稱へて薫の高い、此の匂を嗅ぐと、日本人は何となく、硫黄ヶ島を聯想する、硫黄の燃えるやうな煙を吹出しながら、今まで郵便函に建掛けてあつた、自然木の杖を取つて脇の下へ高くあげて、脇を鍵形に曲げて、しつかり搔込むと、同時に片足を出して、てく／＼歩行き出した。麥藁帽に打つた帝國大學の徽章は、射照らす光線に輝いて、口髯を籠めて横ざまに頬を撫でる Isabella の烟は、縷々として長く其背後に靡く。

前途から旅装束、二三度水を潛つたと見える久留米飛白の襷せたのを端折つて、瘡脚に表打の

低い下駄、紺足袋穿で、角帯を締めた、胸を擴げ、釦三ツばかり露はして襯衣を着て。眼の色の濁つた、鼻の低い、色の淺黒い、伸びた髪を額に懸けて、帽子を被らず、蝙蝠傘を翳して、熱砂の中をすた／＼遣つて來たものがある。

扮装恰好、さまで長途を來たものとは思はれぬ。八王子、國分寺、其邊からであらう。

渠は學生に行逢ふと、汗の染むだ眼を瞬いて、上眼使ひをして、何か落着かない風、きよときよとした顔を仰向けて、

「え、些少お尋ね申しませう。」

無言で學生は足を揃へて、すつくと停まる。

男は挨拶もしないで、

「平長といふ方、御存じではなしかね、」といひかけて、傘を横に取つて、頬の汗を拭いた。

「何です、平長といひますか。」

「巢鴨の親分さんでおいでなさんすのでござんすが。」

「知りませんな。」

と決然として答へた。學生は卷煙草の灰を、脇挟んだ杖の柄に當てて、拂いて落すを合圖に、窄袴の膝を突張つて眞直に足を出して、圓規を一杯に開いた如く大跨に歩行いて行く。

……番地は、十九軒棟割の貧乏長屋で、鍵形に建連る、一方は隣の垣根で、長方形をなした路地の中に松の樹を植ゑてある。枝の差出た下は、小蔭で、其處に車井戸。

井戸の傍に一軒、門の附いた、別な住居がある。此の前へ來て學生は其の喫さしの煙草を棄てた。

「御免、御免なさい。」

内では黙つて應じない。

「失敬、御免なさい、失敬。」

とまた呼むだが、同じく返事をしないので、學生は考へながら、其の大きな鞆を二ツ三ツ砂に擦つた。

暫時して。

「失敬、時さんは居ませんか、時さん、時さん。」と姿勢を正しくしていつた。蟬の聲ばかり、風をして震動せしむるが如くに聞える。

疾には通じさうにもないので、學生は立直つて、大股に歩いたが、一列ある長屋のはづれの、

トある格子戸の前に立つて、顔を近々と差寄せて、

「失禮、少々伺ひたいんですが。」

「何ぞ用かね。」これは直ちに應じたが、其の聲は鈍のある、痰の引懸つたやうな、疲れたらしい、且つ咳びたものであつた。

學生は意外に便を得た様子で、門ながら腰を屈め、

「其の、お隣ですがね。」

「用かね、用があるなら其處からいひなさい。お目に懸らんでも解るぢやらう。」

見れば、此目中を閉込んで居るらしい。薄暗い家の中から、膠なく、繼穂なく、斯う答へた。

こんな調子に對しては餘り込入つた筋の談話を爲し得らるゝものではない。極めて簡単に、極めて眞率に、直截して其要をいふべきだけれど、郵便函の上で鉛筆で葉書を書くにも扇使をする人物であるから、

「左様、お目に懸りませんが解るんです。」

といひかけて少し聲高く、

「お隣ですがな。」

「貸家かね、あれは何ぢや。別に奥はないので、奥は覽なざる通昌ぢやが、家主の婆がな、全然

いの字も讀めぬから女が書いて寄越したのを持つて來て取違へて貼つたのぢや。木戸の處には唯（かし家）としてあるぢやらう。あれを隣家へ貼つてな、（奥に貸家あり）といふ方を木戸へ出して置く譯ぢやに、文盲であべこべにしたで、皆が迷ふよ。貸家は隣だけで、奥にはないのぢやで、搜したとて見附かりはせぬ。見るならば見なさい、六疊と三疊で建具は附いて居るが、疊は臺なしぢや。其まゝで好くば一兩二分、疊を入替へれば其上に一分價が上る。孰にせい、三月分前店賃で取るといふ強慾ぢや。家主がいふまゝに取次ぐぢやからな、誰も借手はありやせぬ。あたりまへなら、一月分前店賃で一兩がものぢやよ。悪いことはいはぬで、爲にならない、損ぢやから止めにさつしやい。」

全然思ひも懸けぬことを、立續けに聞かせられる。

四

此長屋十九軒の中に、男ばかりで暮らすのは、此差配と、隣家の浦里が住居のみ。

若夫婦に、其の母と思はるゝ年寄の居る内もあれば、姉と妹と女親と三人で、主人は行ツ切に砲兵工廠を稼ぐのもある。

年は二十で美しいといふ評判のが、産後に亭主に死別れた哀な婦から、嬰兒を貰つて、牛乳で

育てて、慥な女房と、優しい亭主と二人が世帯で、朝から腕車を曳くのがあり、また旗本の女で御殿に奉公をしたのが、出入の植木屋と出来合つて、駈落をした、それからさまゝの苦勞を仕舞いた擧句、今は寄る年波の老夫婦も居る。十三を頭に小兒が六人、女房が駄菓子賣つて、亭主が足袋を刺す、他に職人が二人、同じく寢泊をする、瘡せた車夫が一人、これが近い頃肥つた嫁を取ると、來た月から孕むだ。大抵此夫婦ばかりでも家中充滿にならうのに、搗てて加へて千葉縣の在所から女房の縁續だといふ十八九の女で下女を志願で出て來たのが居る。のみならず、店には古足袋が堆い。まだく微塵棒、かりん糖、ぶつ切飴、鐵砲玉などを竝べて、外に、此夏から心太と甘酒を賣出したから堪らない。

店前に竝べた二脚の腰掛は、甘酒心太の客のために備へたのだから、狭いといつて、これへ乗つて團扇使をする數ではないので、隣地面の華族の邸の塀と、廂合との間の地の上へ筵を敷いて、内から溢れ出した徒が土人形のやうに坐つて居る。

隣には、ぼてふりの七といふのがあつて、祖母と二人の暮し、魚と大きく書いた腰障子の傍の盤臺は干乾びて、鰯の干物と、なまり節と、何ういふ取合せか知らぬ檻襖切が賣つてある。それから女房が身を投げて、残つた小兒が二人、父親は病氣で寢て居るものもある。看守やら、仕立屋の職人やら、日傭取。無いのは三味線を弾く新造ばかりで、老若男女打交せて八十人有餘の中に、

既にいつた男ばかりの世帯といつては、差配と浦里の二軒に過ぎない。

同一男ばかりの住居だけれども、浦里の家は夜も明くつて、差配が住居は晝といへども暗いのである。

敢てものの色の白きを以て、これを明いといふのではないが、浦里の家は疊も白く、障子も白く、壁も白く、蚊屋の釣手の紐も白く、夜は洋燈の火屋も白い。第一時次郎の色も白い。黒いものといつたら、渠が髪と、疊の縁、唐紙の引手、其等であらう。

たとひ外出をして留守な時も、大戸は閉めず、雨戸も繰らず、引窓も塞がないで、開け放しの室の内は、ものの影もなく、何時でも明い——花の頃——青空の日中、格子戸が開いてたから、遠慮なしにすつと入ると、誰も居ないで、火鉢の火も消えて居た、櫥子窓を透す樹立の影で艶々と見える机の上へ、風あるともなく、春晝寂として何處のか花片がちら／＼と静かに散つた。

多時見て居ても、人氣勢がせぬので、其まゝ立洩なく悄々と極の悪い思をして引返したことの覺があるので、今日は晝寢と見當を着けぬでもないが、案外な男だからと、學生は斯うやつて様子を聞きに差配が門に立つたのである。

五